

---

## 2月19日 「『十人のおとめ』のたとえ」 説教展開例

---

テキスト            マタイによる福音書 25章1～13節  
参照カテキズム    子どもカテキズム 問81

---

### 〔単元のねらい〕

「日々、御言葉に聴き、主との交わりに生き、信仰のともし火をともし続けよう。」この単元目標の内容が、譬え話の筋に沿って物語られねばならない。「十人のおとめ」と「花婿」との関係、「ともし火を持って出迎える」その役割、「油を用意する」ことが「賢い」とされる意味、「眠気がさして眠り込んでしまう」その事実、「油を分けてあげられない」その理由、「婚宴の戸が閉められる」その秘儀。これらを、当時の婚礼の習慣と情景によって、いきいきと語りたい。

---

### 「灯火の油を用意する」

---

今日は、結婚式のお話です。それも、イエスさまの時代の、ユダヤの国の花婿と花嫁の物語です。一人の若者が一人の乙女を見初めて、二人が愛し合い、結婚の約束を交わして夫婦になる。そのような結婚もありましたが、多くの場合は、二つの家の親どうしが約束を交わし、息子と娘を許嫁にして、一年ほどの婚約期間のあと結婚させる。それが普通でありました。

結婚式は、花婿の家で行われます。婚約期間の終わりが迫ると、いよいよ婚礼の日に向けて準備が大わらわです。披露宴の席には、すべての親戚が呼ばれ、花婿と花嫁のすべての友人、友人の友人、そしてすべての村人が招かれます。花婿の家は、満席の客人を盛大にもてなすのです。結婚式を取り仕切るのは、花婿の友人たち（若者たち）です。彼らは、常に花婿の側にいて、すべてに気を配り、楽しく愉快に振る舞う介添え人です。結婚式の前日、披露宴の準備が整う夕方頃、花婿は婚礼のために仕立てられた晴れ着を纏い、ソロモン王のように冠を頂きます。介添え人らの指揮のもとに行列が組まれ、花嫁を迎えに出かけてゆくのです。

一方、花嫁の家では、花嫁の装いに余念がありません。髪をふさふさと垂らし、顔をヴェールで覆い、額の上に金の飾りをつけ、宝石の装身具で飾ります。花嫁に付き添うのは、花嫁の友人たち（乙女たち）です。彼女らは、花嫁の家の玄関先で、

灯火を持って待ちます。花婿と若者らを出迎え、花嫁を輿に乗せて、花嫁の家から花婿の家まで、壮麗な花嫁行列に付き添うのです。そして、結婚式と披露宴でも、花嫁の付き添い役を務めるのです。

いよいよ婚礼の日の前夜、花嫁の家の玄関先には、十人の乙女が灯火をともして待っています。五人の乙女は灯火を持っていましたが、油を用意していませんでした。他の五人の乙女は灯火とともに、花嫁行列に必要な分の油を壺に取り分けて用意していました。今か今かと待つのですが、いっこうに花婿は現れません。とっぷりと夜はふけてゆきます。待ちくたびれて、緊張が途切れたせいか、十人の乙女は居眠りを始めます。油を用意していた乙女らは、いつ花婿が訪れても大丈夫、そう安心して居眠りできたでしょう。しかし用意していない乙女らは、どんな気持ちだったのでしょうか……。

すると突然！「花婿だ！ 迎えに出よ！」。真夜中に叫ぶ声が出て、十人の乙女らは目を覚まします。灯火が消えかけています。油を用意していた五人は急いで、灯火を整え直し、迎えに出ようとします。しかし、油を用意していなかった五人は慌てて、「油を分けてください」と頼みますが、断られてしまうのです。もしも油を分けたら、十人も行列の途中で灯火が消え、花嫁の付き添いを果たせなくなるからです。花婿に対して、礼を

失することになるからです。

灯火を整えた乙女らは花嫁行列に付き添ってゆき、灯火の消えかけた乙女らは急いで油を買いにゆきます。しかし真夜中に油を売ってくれる店は見つかりません。彼女らが手間取っているうちに、花嫁と付き添いの乙女らは、花婿の家に着き、結婚式に臨み、披露宴の席に着くのです。そこで、花婿の家の玄関戸は閉められます。遅れてきた乙女らは、「ご主人様！ ご主人様！（主よ！ 主よ！）開けてください！」と叫びますが、家の主人から「お前たちを知らない」と言われ、閉め出されてしまうのです。

花婿の家の玄関戸が閉められる。イエスさまがそう語られるのを聞いて、ユダヤの人々は「アレ！ 変だぞ」と思ったでしょう。婚礼の日から7日間、宴会は延々と続き、花婿の家の玄関は開けっ放しで、あらゆる人が出入り自由のはずだからです。そこで人々は気付いたでしょう。「さては？」これは普通の物語ではないと。イエスさまの譬え話に違いないと。

アーメン！ その通りです。「花婿」は十字架のキリスト、すなわち復活の主イエスのことで、「花婿の介添え人」は預言者、すなわち福音の伝道者のことです。「花嫁」は主の民、すなわちキリストの教会のことで、「花嫁の付き添い役」は教会の奉仕者、すなわち主のしもべ・はしためのことです。「花嫁の家」は地上の住まいで、「花婿の家」は天の永遠の住まい。「婚礼の日」は人の世の終わりの日で、「結婚披露宴」は神の国の完成を祝う宴会。そこで「玄関戸が閉められる」のは、最後の審判があるからです。

なぜ、花婿は遅れたのでしょうか。宴席がなかなか満員にならなかったからです。呼んでいた親戚や招いていた人々が来なかったのです。花婿の家の主人は、なんとか満席にしようと、召使いを町の大通りに送り出し、誰彼かまわず宴会に連れて来させます。招かれた人のうち、礼服を着ていない者は婚礼の客には選ばれず、宴席に着くことは許されませんでした。そんな事情で、花婿も

介添え人らも、花嫁を迎えに行くのが大幅に遅れたのです。これは、神の国が「すでに」到来したものの「いまだ」完成していない今の時代、すなわち、福音がまだ全世界に宣教されておらず、神の民の全員がまだ召されていない今の時代を譬えているです。

花嫁の付き添い役が持つ「灯火」とは、信仰に他なりません。十人の乙女らは、同じ信仰を持つ姉妹たち、教会の奉仕者たちです。そこで、油を用意していなかった乙女らは「愚か」と呼ばれます。花婿はすぐに来る。そう信じ込んで、遅れることを想定していなかったからです。一方、花婿が遅れる場合も考え、花嫁行列に必要な油を取り分けて用意しておいた乙女らは「賢い」と呼ばれるのです。

灯火は持っていたが油を用意していなかった乙女らが、婚宴から締め出されたように、イエスさまを主と呼ぶ信仰は持っても天の父なる神さまの御心を行わない者は、天の国に入ることはできません（7:21）。主のしもべたち、教会の奉仕者たちが信仰を持ち、光を輝かせる（5:14～16）ために用意しておく「油」とは、神の御心を行うことに他なりません。

だから目を覚ましていなさい。あなた方は、その日・その時を知らないのだから。このご命令を聞き違ってはなりません。世の終わりの日がいつ来るか分からないから、常に緊張して善き行いに励みなさい、という命令ではありません。恐れにかられて不眠不休で働け、ではなく、むしろ喜びと感謝に満ちて、愛と平安のために奉仕しなさい、というご命令です。賢い乙女たちを御覧なさい。彼女たちは安心して居眠りできたのです。花婿と花嫁を愛し、婚宴に招かれたことに感謝し、喜びを共にしようと最善を尽くしたのです。そのために油を用意したのです。イエスさまと教会を愛し、洗礼と聖餐に招かれたことに感謝し、喜びを共にしようと最善を尽くす。そのように灯火の油を用意する賢さを、私たちも祈り求めましょう。

（二宮 創）

---

〔今週の暗唱聖句〕 マタイによる福音書 7章21節

わたしに向かって、「主よ、主よ」と言う者が皆、天の国に入るわけではない。

わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである。

---

## 〈ねらい〉

イエスさまはたとえでもってお話をされましたが、それは聞く者が悟るためでした。幼稚科の子供たちには、御言葉を聞いて悟った大人が、もっとかみくだいてお話をすることを主から求められています。灯火の油＝聖霊＝御言葉と共に働くお方、ととらえてお話をつくってみました。

## 〈展開例〉

## 【お話】

イエスさまはいつか帰って来られます。どんなお顔なのか、どんなお声なのか、楽しみです。みなさんはお客さんをおむかえするのに、どんなしたくをしますか。(手を上げて) お部屋をかたづけの人? 掃除機をかける人? 玄関のはきものをきれいにならべる人? お飲み物やお菓子を用意する人? いろいろやって、用意しますよね。

それでは、イエスさまをお迎えする用意はどうしたらよいのでしょうか。普通のお客さまはピンポンと鳴らして玄関から入ってこられます。でもイエスさまは天から雲に乗ってやってこられます。そしてイエスさまを信じる人を、世界中から集めてくださいます。どんな人を集めてくださるのかというと、心が明かりで照らされている人です。ふつうの明かりではありませんよ。(聖書を持ちながら) それは聖書という明かりで照らします。聖書の言葉を聞けば聞くほど私たちの心は神様の光で照らされ明るくなります。もし明かりが消えていたら、その人は連れてゆかれません。

ですからイエスさまをおむかえするためには、聖書の言葉で私たちの心を照らし続けることです。毎週教会へ来て、聖書の言葉をどんどん聞きましょうね。そうすれば私たちの心の明かりは消えません。いつイエスさまが来られても大丈夫です。

## 【祈り】

天の父なる神さま、いつイエスさまが来られてもよいように、聖書のお話をたくさん聞いて、心が明るくなりますように。イエスさまのお名前でお祈りします。アーメン。

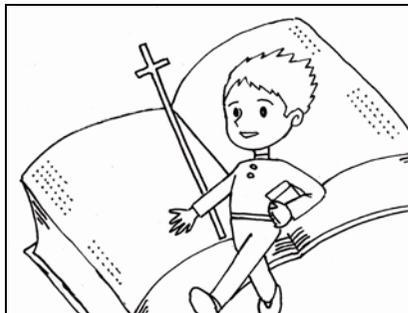
## 〈幼稚科カテキズム(聖書)〉

せいしよは、わたしたちの

ところをたります。

## 〈暗唱聖句カード〉

## せいしよ



あなたの御言葉は、わたしの道の光(詩編119:105)



ねらい

「花婿が到着して、用意のできている五人は、花婿と一緒に婚宴の席に入り、戸が閉められた」と書かれている。残りの五人はともし火の火を絶やさないようにする油が切れてしまっていたので、慌てて買いに行っているうちに戸が閉められて、間に合わなかったという話である。

信仰者に対する厳しい警告が語られていると解釈できる。しかし、この話は、同時に十人のおとめにとっての喜ばしい花婿との婚宴の話でもある。従って、この喜ばしい婚宴への期待を膨らませて、前向きに喜んで用意する心構えをまず確認する必要があるであろう。

展開例

結婚式は楽しい喜びの日ですね。結婚の日を待ち望んで毎日、喜んでその日を数え、準備

をします。みんなそうだと思います。そのような準備をしない花嫁は、本当に結婚する気があるのかどうかが問われます。ですから、たぶん、残りの五人のおとめたちは、本当に真剣には結婚のことを考えていなかったのではないのでしょうか。

本当の心が通わない、形だけの結婚はあまり楽しくないし、幸せでもないですね。

イエス様を信じ、神様を信じる場合にも、「本気で心から」がお互いにとって幸せなことだと思います。残りの五人にならないように、神様を心から真剣に信じて頼っていきましょう。

祈り

心から神様を信じて毎日喜びを持って生活できるように、神様の聖霊を私の心に満たしてください。

～ 話し合ってみよう ～

将来の楽しいことを想像して、その実現に向けて、毎日生きているかどうか、話し合ってみよう。



自由メモ



聖書日課

マタイ 25 : 1～13

暗唱聖句

「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである。」

(マタイ7:21)

〈ねらい〉

五人の賢いおとめたちと五人の愚かなおとめたちは、どこが違ったのでしょうか。その違いをとおして、イエス様が再び来られる時、天国を受け入れていただくためにどういう生活（準備）をしないといけないかを考える。

〈展開例〉

賢い五人のおとめたちは花婿が来るのが遅くても、ともし火に必要な油を用意していた。いつ来てもいい様に準備をしていた。しかし他の愚かな5人のおとめたちはともし火は持っていたが油の準備ができてなかった。賢いおとめたちに「油をわけてください。ともし火が消えそうです」と頼んだが、「分けてあげるほどはありません。それより店に行って自分の分を買って来なさい」と言われた。買いに行っている間に花婿が到着して、

用意のできている五人は花婿と一緒に婚宴の席に入り、戸が開められた。その後、他の五人のおとめたちも来て、戸を開けてくださいとお願いしたが、「わたしはおまえたちを知らない」と言われ、入ることができなかった。

花婿＝イエス様はいつ来られるか、わからない。私たちもイエス様がいつ来られてもいいように、いつもイエス様の教えを守り、聖書の教えに聞きしたがった生活を努力し、準備をしよう。信仰のともし灯をともし続けよう。

〈祈り〉

神様、いつも聖書をとおしてイエス様の話をおぼることができてありがとうございます。いつイエス様も来られても神様の子供として受け入れていただけるよう、私たちの生活を導いてください。イエス様のみ名によってお祈りします。



対話の手掛かりとして……

- ①花婿を待っている十人のおとめたちの中には、五人の愚かな者と五人の賢い者がいました。両者の違いばかりが目立つこの譬え話ですが、共通点もあることに気付かされます。5節を見てみましょう。「ところが、花婿が来るのが遅れたので、皆眠気がさして眠り込んでしまった」とあります。ここに記されていることは、花婿を待っているおとめたち全員が、つまり、主イエスの再臨を信じて待っているクリスチャンたちが眠り込んでしまうことを前提として語られているのです。
- ②しかし同じように眠り込んでしまう者たちの中に、賢い者と愚かな者という違いがあります。3～4節を見ると、その違いが、予備の油を持っているかどうかであることが分かります。そうしますと、この予備の油とは、私たちがどれだけきちんと主イエスの再臨に備えているかということだけを意味しているのではないと思います。もし、私たちが用意周到にいつも備えをしているということだけであれば、それは「いつも目を覚ましている」ということです。信仰的に、弱さや欠けがないように、どこにも隙がないように万全の体制をとっているということです。しかしこの賢いおとめたちの姿が語っているのは、そういうことではありません。彼女たちも、他の人たちと同じように、弱い者であり、眠気に負けてしまう者であり、いつもちゃんと待っていることができない者だったのです。
- ③賢い五人のおとめたちが持っていた予備の油は、主イエスの再臨をいつも目覚めて待つことができない弱さを持っている者であっても、いざという時に、目を覚ましてちゃんと主

イエスを喜んで迎えることができるものです。それは決して、私たちが自分の内に持っているものではありません。あるいは自分の努力や決意によって維持することのできるものでもないと思います。私たちが、信仰において眠り込み、主イエスの到来を覚えて待っていることができなくなってしまうということは、神さまのご支配を疑いということです。それは私たちの罪です。でも、その罪人である私たちが、それでもなおクリスチャンとして、主イエスを喜び迎える者となることができるとすれば、ただひとつ、主イエスによる罪の赦しの恵みによるしか他ありません。この主イエス・キリストの恵みこそが、予備の油なのではないでしょうか。予備の油があるとは、自分の中に何らかの信仰的な蓄えがあるということではなくて、主イエス・キリストによる罪の赦しの恵みを知っていて、それに依り頼むことができる、ということです。それ以外に、眠り込んでしまう私たちが、再び目を覚まし、主イエスを喜び迎える者となる道はないのです。そのために今、主イエスは十字架に向い、その途上でこの譬え話を語っていることを覚えましょう（26章～）。

- ④ところで、なぜ賢いおとめたちは、愚かなおとめたちに油を分けてやらなかったのか、不親切ではないかという素朴な疑問が生まれるかもしれません。しかし、この油は、人に分けてあげることができるようなものではないのです。人のものを借りて間に合わすことのできるようなものではないのです。ですからここで、ひとり一人が、自分の信仰を問われます。主イエスの十字架が、自分のためであり、自分の罪の赦しの恵みがそこにあると受け入れるかどうかを問われるのです。



### 〈背景と文脈〉

主イエスは十字架にかかれる前、終末について弟子たちを教え、それに関して多くの警告を与えられた。それらはマタイ24～25章に収められている。特に24章45節～25章30節には、主が語られた三つの譬え話が収められていて、再臨を待つキリスト者はどうあるべきかの指針を与えてくれる（註、25:31～46を譬え話に分類する人々もいるが、現代は、そうでないとする人の方が多いようである）。

24章45～51節（忠実な僕と悪い僕）と25章1～13節（十人のおとめ）の二つの譬え話は、いつかわからない再臨に備えることの大切さを教えているのに対して、今日学ぶタラントンの譬え話は、再臨を待つ者の生き方について教えている。

### 〈タラントンを預けられた僕たち（25:14～18）〉

「旅行に出かける」（14）とは、主イエスが昇天されることを指し、「主人が帰って来て」（19）は、主の再臨を指す。主の昇天から再臨までの間、私たちはどのように生きるべきかが、この譬え話の主題である。

主人は旅に出るにあたり、三人の僕を呼んで、彼の財産を預けた。彼らの能力に従って、それぞれ五タラントン、二タラントン、一タラントンを預けた。タラントンはギリシャで用いた計算用の単位で、6,000デナリオンに値する。一デナリオンは当時の労働者の一日分の賃金に相当するので（マタイ20:1～16参照）、一タラントンでもかなりの額であることがわかる。

五タラントン預かった僕は、早速出て行き、それで商売をして五タラントンの利益をあげた。また二タラントン預かった僕も同様にし、二タラントンもうけた。しかし、一タラントン預かった者は、出て行って穴を掘り、主人から預かった金を隠しておいた。先のふたりの僕が、すぐ出て行って預かったタラントンを活用したのに対して、三人目の僕は、それを全く活用しなかった。

### 〈主人の評価—称賛と叱責（25:19～30）〉

主人が旅から帰り、清算の時が来た。五タラントン預かった僕は、その五タラントンと共にもうけた五タラントンをもちて来て、主人に差し出した。また二タラントン預かった僕も、その二タラントンと共にもうけた二タラントンを差し出した。主人は、この二人の僕を忠実な良い僕と称賛し、わずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう、と言った。しかし、三人目の僕は預かった一タラントンだけを持ちて来て差し出した。彼はそれを全く活用しないで、穴の中に隠しておいたからである。

タラントンは何を指すだろうか。「タラントン」という語から、才能という意味をもつ英語のタレントが派生した。それで、タラントンについても、特別な才能、賜物と解釈する人が多い。しかし執筆者自身は、そのように狭義に解釈するより広義に解釈する方がいい、と考えている。実際に、私たちに属するものは何もなく、すべてのものは主からの預かりものだからである。すなわち、命、体、家族、社会的地位、財産、教育、才能、知識、霊的な賜物など数え上げればきりが無い。それらは僕である私たちの持ち物ではなく、活用して主に利益をもたらすために、私たちに一時的に預けられているものである。預けられているものに私たちは責任を負っており、いつの日か清算のときが来る。

称賛されたふたりの僕は、僕としての意識とそれから生まれる使命感によって、彼らの利益にならないと知りながら、忠実に主人のために働いた。「怠け者の悪い僕」と叱責された僕は、「あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方」（24）と言っているように、主人に対しての見方が曲っていた。僕としての意識と使命感、また主人に対する畏敬の念が欠如していた、と言える。

（後藤公子）

※第34号（7月26日聖書研究）からの再掲載です。